

---

# 残さず全部食べるから…

国後旺

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

残さず全部食べるから…

### 【Zマーク】

Z6852D

### 【作者名】

国後旺

### 【あらすじ】

あることがキッカケで、私は彼を好きになった。でも、それを言えない日が続き、気が付けば明日はバレンタインデー。私はこれを機に、彼に告白しようと思つた…。けど……学校に、彼の姿は無くて…（ジャンル：恋愛）

(前書き)

登場人物に名前はありません。  
名前の決め手は「あなた」です。

2月14日。バレンタインデーと称される…女の子がチョコレートを作つて意中の人へプレゼントしたり、友達にチョコレート配り合つたり、義理チョコを男の子に恩着せがましく、「ホワイトデー楽しみにしてるから」的なこと言つてコンビニチョコを配つてまわつたり、ともかくにも男女が1日中ソワソワしている田のこと。いや、他は知らないよ? うちらの地域ではそんな感じです、てなだけよ。

その日の前日の夜。

私は今、チョコを作つておりますのだ。我ながらガラにも無い事してるな。普段は皿洗いすらしない親不孝な娘として、ハイ。

うん? 何でチョコを作つてるかつて? そりや聞く方が野暮でしょうよ。でも教えるね。

誰にあげるかというと、それを言つてはあの日の事を語るほか無いですぜダンナ。あれは…

あ、回想入ります。

あれは夏休みが終わつてすぐの事。私は腑抜け学生によくあり得る遊びに遊びまくつて溜まりまくつた夏休み宿題を新学期前日に終わらせるという荒技を使い、セミの抜け殻になつてたんよ。そんな時さ、

「どうした？」

彼に話しかけられたのは、学校にいるときは普通に話しかけたりされてたが、夏休み明けの為に懐かしく感じる。焼けたね、アンタ。

「随分疲れてんな、お前。暑さにやられたか？」

彼は額から汗を垂らしながら右手に赤下敷きを、左手に青下敷きを持ち、両手のソレで扇ぎ、暑さを紛らわしていたよ（今でも鮮明に覚えてる）。

だつらーんとしてた理由は違うが、まあ暑いことも否めないため私は、「一つで充分だろ、だから一つ寄越しなさい」と、田を狼の瞳並みにギラソソとさせてた。いや、

「安心しろ。お前にくれてやるために持ってきたのや」

おお、有り難い。仮だよアンタ。うお、ブーメランみたいに投げてきよった。危ないな、おい。田に入つたらビリするつもりだったんだ、おい。

彼は、「わりーわりー」という。思つてもないくせに。

キーンコーン、カーンコーン

チャイムが鳴り、「じゃーな」と席に戻るつとする彼。といつても田の前の席だが。しかし私の横を横切る瞬間、

「徹夜、」くるーさんと私に頭ポンポンしながら言つてきた。不意打ちだ。不覚にも顔が熱くなつたね。たぶんさ、この時だらうね。

彼を気になり始めたのは。

あれ？ ちょい待ち。何で徹夜したの知つてんのさ、あんた。

「君の田のトニ、可愛いクマさんがいたからさ」と彼。この、キザやうー。

それで完全にヤられた私も私だけどね。

でもそれから大変だつたよ。毎晩の夢に彼が出てきてさ、いつのまにかクマさんはパンダさんになつてたね。

私が少し考えたらすぐに答へはでた、「もう告白するしかない」つてね。だつてこれ以上夢に出てこられたらパンダさんはジャイアントパンダさんになつちゃうからさ、でも…いかんせん彼はモテるのよ。周りにはファンクラブまでいるくらいこわ。そんな中、告白してみ？ 命尽きるね。

で、時間がだらだら過ぎちゃつてもう一円さ。春休みまであとわずか…そして私は決意したよ。「もう逃げない」つて。バレンタインデーに賭けてやうひつて。そのとき田中もいつしょにしてやる。

で、現在に至る。私は、家庭科5なんだよ。チョコなんてお茶の

子さいさいさ（古いな私）。ジャイアントパンダ対策も大丈夫。今日学校休んで一日中休んだらどうか行ってくれた。今までありがとうパンダさん。という戯れ言を言つてゐる間に例のモノは完成した。残るは最後に仕上げをするのみよ。手でハートマークを作つて…

ラブパワー、注入！

痛い！ 痛いね私！！

翌日、彼は学校に来なかつた。

運良く連続して彼の後ろの席を獲得していた私は愕然としたよ。なんどりにもよつて今日休むのさ。ヤバいわ、涙出そつ。…出せないけどね。そんなのかっこ悪いじやん。

授業中コソコソとメールを打つ私。相手はもちろん彼だ（昔からこそここ仲が良いからメルアドは知つてた）。「なんで今日学校休んでんのさ」と送信。

一分もたたぬ間に彼からメールが来た。

「だりーから」だとわ。お湯を掛けられたネコのように俊敏な手つきで返信メールを打つ私。「学校来てよ」と送信。

新着メールが三件届いた。

一つ目、「やだ」  
二つ目、「今日10時に、入りの絵公園に」  
三件目、「渡したいモノがあるんだろ？」

嫌なヤツ…。

そして言つことを訊く私はまるで忠犬ハチ公だな。案の定彼はメールの指定場所の中で、一番最初に目に付く「プラン」乗り場の手すりに腰を掛け待っていた。いつものブレザーに黒のマフラーを掛けている。私に気づいて手をふりふりする。

「なんで来なかつたの？ 学校」「だりーからつて言つたじゃん」

「嘘だ」「ウソだよ」…「いの。

「はい」例のモノを投げた「ん？」何コレ」「分かつてゐるへせに聞くな」

「ははっ…開けていい？」口を動かす度に白い煙を吐きながら、彼は私に聞く。どうや。

パカッ 「おおつー 可愛いな」

君、チヨン見て可愛いとか言えたんだね。ちょっと意外だな。「失礼だな、お前」「あんたに言われたくない」

「じゃ、さつとく…」

パキン

「おお、ウマいじゃん!」なんだその意外そうなカオは。

「俺チヨ「好きなんだよねー」

「……じゃあ何で今日来なかつたのよ？ あんたなら…いつぱい貰え  
るじやん」

「お前の以外は欲しくなかつたんだよ」

「…………え…………？」

不意に彼が、チヨコを片手に私を抱きしめた。綿菓子のよつに柔らかく甘い匂いのする髪の毛が私の耳にかかり、少しこそばゆい。彼は「はあ～っ」と息を吐き出してチヨコを食べている。パキンと良い音をたてた。私はしばらく頭が真空状態だったが、いつのまにか彼に公園の草花の中に押し倒されてたので意識を取り戻した。うわー。

「……私が来なかつたら、どうしてた？」冷静を装つて聞いてみるが、胸のところが凄く熱くなつて内心はバクバクだ。ああ、暑い。本当に冬なのか、今は。

「ずっと待つてたんじゃない？ 僕、お前が全てだから！」

「…………」

「私、顔良くないよ？ 「過小しそぎだつて」  
「私、成績悪いよ？ 「あはは、なんだソレ」  
「私、性格悪いよ？ 「俺は好きだけどなー」

不覚にも… 「……私も、君が好き」

「ああ、知ってる」

彼がそう言ったから「嫌な奴」と言おうとしたが、

彼の唇に塞がれて、飲み込んだ。

私は、温室に置かれたチョコのよう、「とろけてしまった。冷凍庫に入れられても、もう一度と形が戻る」とは無いだろうな…。

「入れさせねえよ。俺が残さず全部食べるから」

(後書き)

end

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6852d/>

---

残さず全部食べるから…

2010年11月22日10時20分発行